

おしゃれな気づき：日本の消費者がインドの綿花栽培農家をサポートする

インド NGO のチェトナ・オーガニックと日本の㈱フェリシモは、JICA(国際協力機構)の支援により、オリッサで PEACE BY PEACE コットン・プロジェクトを実施していますが、インドの綿花栽培農家のよりよい生活、よりよい貿易、より多くの利益のために、フェアトレードと有機栽培推進運動に力を入れています。

日本で 10 代の人々が単におしゃれなブランド商品を買うとしたら、特にコメントはありません。よくあることです。

ですが、その購買選択がオーガニック・コットン 100%だからだとか、6,400km も離れたインドの村の農民が育てたものだからだとしたら、その商品を手取るのに理由があることとなります。オーガニック（有機）栽培であるとか、フェアトレード商品だということが意味を持つのです。

健康に対する配慮から、オーガニック・フードを志向する人の感性は理解しやすいですが、「オーガニック衣料」というのは、ファッション以上の意味を持ちます。つまり、「買う責任」の意味を帯びてくるのです。

オーガニック・コットンを買う消費者を賞賛すると同時に、「かっこいい」商品を市場に流通させられる価格で提供する販売業者の功績も称えられてしかるべきです。

日本の㈱フェリシモ

カタログ販売の先駆である㈱フェリシモは、契約しているデザイナーと提携して 100%フェアトレードのオーガニック・コットン商品を一部扱うブランド「haco.」を通じて、日本の市場に責任あるファッションというコンセプトを展開しています。同様に、フェリシモはインドにおける有機栽培とフェアトレードの促進を掲げ、PEACE BY PEACE コットン・プロジェクトを実施しています。

PEACE BY PEACE コットン・プロジェクト

2010 年に、フェリシモとチェトナ・オーガニック（インドの NGO）は、綿花の有機栽培を通して、インドの小規模で零細な綿花栽培農家の生活手段の選択肢を広げて農業収入を安定・拡大し、国際市場への扉を開くために、PEACE BY PEACE コットン・プロジェクト（以下、PBPCP）を始めました。

PBPCP は、オリッサ州東部のカラハンディ県とボランギル県で実施されています。チェトナ・オーガニック農民組合（COFA）とフェリシモの連携に、JICA はファシリテーターとして関わ

りました。

PBPCP では、フェリシモは化学肥料を使用した栽培方法から有機栽培への切り替えを支援しています。また農家の子弟のうち、学業優秀で経済的必要性のある学生への奨学金供与や、未就学者に通学を促す教育支援も実施しています。

現在、チェトナ・オーガニックは 3000 人近くの農家を支援しています。彼らは、オリッサの先住民で、小規模農家で、有機栽培へ移行している途中の農家です。3000 人の農家のうち、2300 人は有機栽培への移行が完了しましたが、残りの 700 人はステージ 1 もしくは 2 という完全認証になるための移行期にいます。

フェリシモは目下、これらの有機栽培農家のうち 587 名を支援していますが、この先 2 年間で合計 1317 名の有機栽培農家をターゲットにしています。

フェリシモはまた、チェトナ・オーガニックが行う技術研究、統合農法や肥料製造を実践するためのエコセンター建設も支援しています。これらは、農家の農業知識の向上やトレーニング、有機栽培にかかる相談をコミュニティ内で実施するための社会的かつ技術的な延長線上にある活動です。

チェトナの経験

フェリシモに支援される農家は、有機栽培かつフェアトレードのサプライチェーンの保護の下にあります。インドでは 1990 年代後半、農業危機がありましたが、特に多くのコットン栽培農家が仕事を失いました。このような経験を踏まえています。

商品作物としてのコットンは、天候と市場価格に大変左右されやすい作物です。うまくいけば非常に儲かるのですが、その分たくさんの投資をしなくてはなりません。

ですからチェトナ・オーガニックは、農家が化学肥料や農薬を使用して大地に負担をかけ、品種改良種の使用や肥料などの多量の投入をしなくて済むように、自然のサイクルに沿う栽培法に戻る支援をしています。

何年もかけて、チェトナは多くの農家を有機栽培に戻すことに成功してきました。農家は、作物の質を高め、土壌を健全に保ち、投資を最小限に抑え、より適切な価格で市場取引ができるよう、長期的視点にたった有機栽培を心がけるよう動機づけられます。

しかし、こういった利益があるにもかかわらず、有機栽培は当初に収穫が落ちることと手間がか

かることがあって、すぐには広がりにくいのです。

チェトナは、種まきから収穫までの全ての過程で途切れることなく社会・技術支援を実施することで、有機栽培への移行を決断した農家が有機栽培を継続できるように支援します。それがチェトナの使命です。

フェリシモの PBPCP は、このチェトナが支援する移行期にいる農家の厳しい状況を緩和し、有機栽培への移行をよりスムーズにします。

ビデオ：チェトナとフェリシモ

ラマ・クリシュナ・ヤルラガッタさん (COFA) <http://www.youtube.com/watch?v=qbFBuxnIvBE>

フェリシモの支援の下、コットン栽培の全ての過程で、農家が技術的知識を伝達する参加型学習方法が用いられています。また農作業のプロセスは、オーガニックであるための基準とフェアトレード認証のためのコンプライアンスを確保するため、「内的管理システム」を通して詳細にモニタリングされます。

農家は団結して自助組織をつくり、自分たちで意思決定し協力するように促されることで、サプライチェーンに組み込まれた単なる受取手ではなく、全ての過程に関わるようエンパワーされます。農民組合は、今では COAPCL (Chetna Organic Agriculture Producer Company Ltd.: チェトナ有機農業生産者会社) を組織して、国内外の市場の消費者に対し、その商品が有機栽培でフェアトレードであることを証明しています。

フェリシモとの連携

有機栽培への移行期にある農家に対する支援と農家の子弟への教育支援は、フェリシモ PBPCP の二大活動です。

現在、PBPCP の下、カラハンディ県内のゴラムンダとバワニパトナの 10 村、1317 農家が有機栽培への完全移行を選択しました。

しかしフェリシモは控えめにこう言います。フェリシモの葛西龍也さんによれば「実のところ、オーガニック・コットンに価値を見出し、このプロジェクトを実際にファンディングしているのは、日本の綿花商です」とのこと。「フェリシモは、インドの抱えるより大きな問題に対して、オーガニック・コットン商品がどのように貢献していくことができるのかを消費者に情報提供しているに過ぎません。それがアドボカシーとなって PBPCP を支援してくださる日本の消費者を動かしていくのです。」

コンフィデンス（信頼）支援の構築

有機栽培を実践している農家には、正しい決断をしたことを保障してくれるサポートが必要です。農薬を使用してきた農家であればなおさら、有機栽培への移行はそう簡単ではありません。

ですから PBPCP は、農家へのさまざまな社会・技術的サービスを通して、移行農家の決断を支える「コンフィデンス支援」を実施するのです。

この社会・技術活動は、自然に存在するものを利用することに加え、農場から出てくる廃棄物を再利用することで、統合農法を促進しています。どれくらいよく全体の農地を利用できるかを示すための実演モデルと試験農場のセットアップも含まれています。

マディング・ブロックにある農民生産者組合のマトゥラブーミ・スワヤム・サハヤック・サマバヤのエコセンターを訪問しました。ここでは、フェリシモの支援で、デモンストレーションとトレーニングを兼ねた試験農場を展開し、統合農法をいかに統合漁法や家畜飼料、作物の栽培と組み合わせて 1 つの農場の中で実施できるのかということを実演しています。枝豆のように綿花と同時に栽培することが可能な作物を普及するため、エコセンターは農閑期に栽培可能な作物たるマメ科作物栽培の促進ユニットも設置しています。



オーガニック・コットンが栽培されている試験農場：写真提供 OWSA



シアルジョディ村の研究農場では毛足の長い綿花が植えられている：写真提供 OWSA



害虫を誘導するトラップ（罾）：写真提供 OWSA

フェリシモは、チェトナが試みる種子研究や試験栽培、土壌肥料の開発や普及も支援しています。

ゴラムンダ・ブロックのシアルジョディ村には、オーガニック・コットン栽培のためのチェトナの試験農場があります。コットンの苗はここで育てられ、枝豆のような昆作が可能な作物とともに一定間隔で植えられます。

着色された壺が、コットンの害虫を引き寄せ罾となるため、農薬を使用する必要はありません。

同じ村にある別の農場では、パールラクシュミや DCH32 といった長い綿毛になると期待されている新種の作つけが進んでいます。



長い綿毛を持つもの（上）と通常の長さのもの（下）：写真提供 OWSA

農民の事例



チェトナ提携農家のガンガーラム・パテルさんは彼の統合農地を見せてくれました：写真提供 OWSA

シアルジョディ村のガンガーラム・パテルさんは、自分の所有する 2 エーカーの農地で統合農法を実践している農夫です。

彼は、混作している野菜や果物を指し、農作業に必要なものは全て農場から調達するので、いかに肥料や農薬を買わなくて済んでいるかという話をしてくれました。

ガンガーラムさんは我々に自分の畑からパパイヤをもいできてくれました。市場で買うパパイヤよりおいしい、と言ったら笑顔になりました。

収穫後のコットンの行方

収穫の後、コットンの中には種を取り除くために工場に送られます。今ではこの種を取るジニングという過程は機械化されているので、山盛りのコットンは工場の中で加工されていきます。他のコットンと交じり合わないよう、オーガニック・コットンは遺伝子組み換えのコットンとは明確に分けてジニングされます。

こうして加工されたコットンはラベリングされ、工場から出荷された後も、どの農家が栽培したコットンなのかということが分かるようになっています。

参照 ジニングの過程：スライドショー（pps ファイル）

教育支援

ほとんどの貧困農家は、子どもに教育を受けさせることが困難です。ですから、多くの子どもが学校を途中退学し、教室で勉強するより両親とともに農作業をして家業を手伝うこととなります。



こういった問題を改善し、貧しい農家が子どもに教育を受けさせられるように、PBPCP は成績は優秀なのに経済的に恵まれない家庭の子弟への教育支援を行っています。

特に、女学生には男子学生よりも 1000 ルピー多い 7500 ルピーを奨学金として供与します。

チェトナが指導する農民グループは、子弟の教育にも力をいれ、子どもに農作業ではなく教育を受けるよう奨励されます。全ての村で全ての子どもを学校に送るためのプログラムの推進も、PBPCP は行っています。



シアルジョディ村の 11 年生のリタは、フェリシモ奨学金を受領しています。

リタが興奮を抑えつつ話してくれたのは、この奨学金で自転車をかうということでした。自転車があれば、大学までの道のりがずいぶん楽になります。リタは、この奨学金を就職に有利なコンピュータ・コースを受講する資金にしようと思っているということも話してくれました。

共有ビジョン

ビデオ：フェリシモのビジョン

葛西龍也さん <http://www.youtube.com/watch?v=u0gAvSkA3RE>

チェトナとフェリシモはインドの農家が自己決定でき、生計手段を安定的に確保できるようエンパワーするというビジョンを持っています。また同時にそれが、フェリシモにも利益をもたらし、社会的責任を果たし、地球に優しいビジネスのモデルになる、ということを目指しています。

フェリシモの PBPCP プロジェクト・スタッフを務める児島永作さんによれば、PBPCP が目指すビジョンは、公平でエコ・フレンドリーなオーガニック・ムーブメントが全ての人に利益をもたらすような世界をつくることです。服をかう人もつくる人も、綿花を育てる人も大地も、みんなが笑顔になれるような世界をつくることを目指しています。